

## 受験生の「志」を熟慮して評価する入試の実現と、その「志」を支援する大学教育で、 真にグローバルに活躍することができる人材の育成を！

佐々木喜一

### ■ 1. はじめに（私的見解）

- ① 現在の大学入試は、主に学力、知識を問い、その正誤を得点化し、最終的にその合計得点で順位を決めて合否が決まるという「統一基準」での、ある意味「公平」な競争となっている。  
この入試方式は「学力が優秀で、知識を多く持っていれば、他の人間的な基礎力も総じて高いであろう」という前提認識のもとで行われてきたものであるが、しかし現実には「入試科目だけ勉強すれば合格できる」という風潮を生み出し、その結果、小中の義務教育（場合によっては幼児期の教育も含め）、そして高校教育のある意味ゴールとして「大学入試」が位置付けられてきたと言える。
- ② しかし一方で、日本の中学生の56%、高校生の66%が「自分をダメだ」と思っていたり（財団法人日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識報告書（2009年）」より）、また別の調査では、日本の中学生で親や先生を尊敬していると答えているのはおよそ2割という結果がある。中国や韓国、EUでは8割の中学生が親や先生を尊敬していると答えているにも関わらずである。
- ③ なぜこのような調査結果が出てしまっているのか。その最大の原因は、社会が、ひいては私たち大人が、親や先生たちが、自分の志や夢やビジョンといったものについて、前向きに話をしたり、またそのことを通して子どもたちを承認して、力づけるような機会が少なくなって（場合によっては無くなって）しまっているからではないか。
- ④ このことを解決しないで日本の教育再生、そして日本の再生もないと思われる。本来幼児期から、そして小中の義務教育、高校教育、大学や専門学校を含めた高等教育という人生の貴重な期間に、その時々様々な体験や経験を通して、一番身に付けなければならないのは自尊感情である「4J」（と弊社では呼んでいる、『自尊心』、『自信』、『自負心』、『自己肯定感』）であろう。これを身に付けることが（これが大きくなればなるほど）、学力を身に付ける土台となり（高い学力を身に付けるモチベーションとなり）、またそれが、真にグローバルに活躍する人材となるためのスタート地点と成り得るものであるからである。
- ⑤ ついては、自分は何のために勉強するのか、何のために学校に行くのか、何を学びたいのか、そして何のために働いて、何を成し遂げたいのか、何のために生きるのか等、自分の「志」について思考する機会を教育課程の中に入れ込み、その中で十分に議論し、確固たる「個」を確立した上で、教育の成長状況を測る機会の一つであると言える入試の場で、従来の一定の学力レベルを測る試験と同時に、子どもたちの「志」を問うこと（小論文、面接等の手段で）をするべきであると考え。
- ⑥ 各大学によってその存在意義や目指す方向性は違い、それに伴い育成したい（育成することができる）人材も違うはずである。大学入試の場が、「大学」と「育成したい人材（＝受験生）」とのマッチングの場であると考えるのであれば、従来型の学力、知識の点数で合否を判定する試験だけではなく、時間や手間がかかっても、受験生一人ひとりの志を受け取って熟慮し、その「人となり」について総合的な評価を行い、実際に大学でいかに育成することができるか（その志をいかに支援できるか、大学として、言わば「オーダーメイドの教育プログラム」を提供することができるか）を検討した上で、「入学許可」の可否を判断するような入試をするべきであると考え。  
これからの日本を考えた時に、それが大学側、受験生にとってあるべき姿であると考え。

## ■ 2. 具体的私案

➤ 「1. はじめに (私的見解)」を受けて、以下に、今後の大学入試についての具体的私案を記載する。

### ◇ ①大学受験で課すもの

区分1	区分2	実施する試験および概要 (私) 案説明
1: 大学進学を希望する全員が 共通で受験するもの	—	<p><b>①高等学校学習到達度テスト (仮称)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等の評価」(資料『中央教育審議会高大接続特別部会の審議状況について』より)を見るもの。</li> </ul>
2: 各大学で課すもの	A: 基準学力 (各大学教育において必要と想定される 学力) を測るもの	<p><b>②二次試験</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各大学、各学部によって受験科目を設定。</li> <li>・英語資格 (TOEFL 等) の基準についても設定する。</li> </ul>
	B: 受験生の「志」や「人となり」を見るもの	<p><b>③学習成績以外の中学、高校時代の活動についてのレポート</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学願書とともに提出する。</li> <li>・就職活動におけるエントリーシートにあたるもの。</li> </ul> <p>⇒何をやったか (どんな評価を得たか) も重要だが、同時にそこから何を学んでどう活かしていくかも重要であり、評価するべきであると考える。</p>
		<p><b>④入学後の自分の学習計画書</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学願書とともに提出する。</li> <li>・どのようなプロセスで、どういう学習をしていきたいか、何年時に自分がどうなっていきたいか等の自分の成長プロセスについて記載して提出する。</li> </ul> <p>⇒大学はこれと⑤の「小論文」を、この受験生の志と求める教育内容に見合った教育プログラムが提供できるか否かについて検討する資料とする。</p>
		<p><b>⑤小論文</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・受験者の志や価値観について小論文としてまとめてもらう。</li> </ul> <p>⇒フランスのバカロレア資格のように、受験生の哲学観を問うような小論文試験も検討するべきであると考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学願書とともに提出するのではなく、受験会場にて受験をする。</li> </ul> <p>⇒各受験者の小論文の内容を基にしたプレゼンテーションや、受験者同志のディベートやディスカッション等の試験の実施も検討するべきと考える。</p>
		<p><b>⑥面接</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上記③～⑤の内容を受け、受験学部の複数 (3～5名程度) の教授等と面接を行う。</li> <li>・基本は大学側が受験生の人間性を総合的に評価する場として設定するが、大学側も、上記①～③の内容を受け、提供することができる具体的な教育プログラム案について話をするレベルまでの面接が望ましい。</li> </ul> <p>⇒それにより、最終的に大学側と受験生が相互合意に至った上で、入学するという流れを作るべきであると考える。</p>

※「2: 各大学で課すもの」の A と B の配点 (配点割合) については各大学の判断に委ねる。

◇ ②①を行っていくための入試スケジュール案について

- 小論文の評価、受験生一人ひとりに対して面接を行うことになると、現状をはるかに上回る、かなり長い時間（期間）が必要となる。については入試時期について検討していくことが必要。
- 各大学の全体の受験生数にも関係し、また高等学校学習到達度テスト（仮称）をいつ、どのように行うか、各大学の入学時期（秋入学や四学期制の導入等）にもよるが、私見ではあるが、各大学は、先述の「2：各大学で課するもの」について、半年程度の時間をかけて受験生をじっくりと「対話する」ように受験課程を進めていくべきではないかと考える。
  - 受験生が複数校受験することも踏まえて、半年程度の時間を前提とした入試期間を想定するべきであると考え。
- 現状の4月入学をベースにした入試スケジュールを前提とすると、あくまで私案であるが、次のようなスケジュール案を提示する。

	時期	大学側の受験進捗スケジュール
1	高3/9月	・(先述の)「②二次試験」の実施。 ⇒二次試験の結果発表。
2	高3/10月	・(先述の)「⑤小論文」試験の実施。 ⇒各受験者の小論文の内容を基にしたプレゼンテーションや受験者同志のディベートやディスカッション等の試験の実施も検討。
3	高3/10～12月	・小論文試験の審査。 ・また願書とともに提出された(先述の)「③学習成績以外の中学、高校時代の活動についてのレポート」と「④入学後の自分の学習計画書」の内容をもとに小論文試験の可否を判定するとともに、次のステップである面接に向けての準備(受験生がどのような志と教育を求めている、それを大学が教育プログラムとしてどのように提供することができるかについてまとめる等)を行う。
4	高3/(翌年)1月	・面接の実施。
5	高3/(翌年)2月	・最終合格者の決定。

◇ ③その他/補足/追加の私見

- (あ) 飛び級制度について
  - 高等学校学習到達度テスト（仮称）をいつ、どのように行うかによるが、高1や高2でも受験可能であり、かつクリアすることができれば、大学受験資格があるとして、先述の「2：各大学で課するもの」に基づいた大学入試を行うべきであると考え。
- (い) 内申点評価について
  - 高校が提出する内申点による評価はあまり参考にするべきではないと考える。学校間格差が発生するため、全体では比較できない部分最適なものであるため。ついてはいわゆる「指定校推薦制度」においても、先述の「2：各大学で課するもの」の中の③～⑥は受験生に課すべきであると考え。

■ 3. まとめ

- 「1. はじめに（私的見解）」の内容の繰り返しになるが、受験生にとって（多くの場合18歳という年齢において）、今までの自分を振り返り、これからの自分について、「志」として言葉にしてまとめることは、今後の人生にとって非常に大切なことになると思われる。もちろん大学を受験しない子どもたちもいるので、このことを教育課程の中に入れ込むことで、日本の全ての子どもたちが自分の志を持っているという状態を作り出すことが、これからの日本にとって、最も重要な教育施策の一つであると思われる。
- またこのような教育を行っていくことが、現在63万人（2012年総務省調査）いると言われ、深刻化するニートの問題、また若者の自殺の問題（20～39歳各年代の死因は自殺が最多、20代の死因の半数近くが自殺）について、解決するための一つの施策になるのではないかとと思われる。